

リテラシー教育後におけるレポート作成の基礎力について

—2019年度以降の「リテラシー演習」を対象に—

千葉 一博

筆者が勤務する大学では、初年次教育の一環として「リテラシー演習」という科目を開講している。本稿は、近年における「リテラシー演習」の教育効果を確認することを目的とする。具体的には、一つのキャンパスを対象として、2019年度から2023年度までに実施した定期試験の結果や授業への出席状況を分析した。結果として、2018年度以前と同様、レポート・論文を作成する基礎力はおおむねついていると考えることができる。

キーワード：リテラシー 初年次教育

1. はじめに

多くの大学では、2008年度における中央教育審議会の答申¹⁾を受け、積極的に初年次教育を実施するようになってきている。文部科学省の調査²⁾によれば、2021年度において98%の大学が初年次教育を実施している。特に、レポート・論文の書き方等の文章作法については91%、大学内の教育資源（図書館等）の活用方法については83%の大学が取り組んでいる。

筆者が勤務する大学はM・Cの2キャンパスあり、入学した学生全員に対し、初年次教育の一環として「リテラシー演習」という授業でレポート・論文を作成する基礎力を養ってきた。「リテラシー演習」の教育効果については、Mキャンパスにおける2014年度から2018年度までを対象に定期試験の結果や授業への出席状況が分析されている³⁾。本稿は、それ以降における「リテラシー演習」の教育効果を確認することを目的とする。方法として、Mキャンパスの「リテラシー演習」における2019年度から2023年度までを対象に2018年度以前と同様の分析を試みる。

2. 科目「リテラシー演習」

筆者が勤務する大学では、1年次の前期に「リテラシー演習」^{4)～8)}という必修科目を開講している。「リテラシー演習」では、レポート・論文を作成する技術を習得し、大学教育に対応できる基礎力を身につけることを目標に、表1に示す内容で、14回の授業と定期試験を実施する。定期試験では表1のAからN課までを範囲として授業で学習した基礎的な事柄に関して出題し、素点は20点満点である。

表1 「リテラシー演習」の授業内容

A	書くということ	F	本論の書き方	K	参考文献目録の書き方
B	報告書とは何か	G	テーマの設定	L	表・図の作成
C	レポートとは何か	H	アウトラインの作り方	M	表・図からの読み取り
D	報告書・レポートの表現	I	文献の収集	N	表・図を使った説明
E	レポートの構成	J	引用のしかた		図書館ガイダンス*

*2019・2022年度のみ実施した。

「リテラシー演習」は、2023年度まで14年開講されてきた。授業は、2019年度まで16人の専任教員で、2020年度から2人の非常勤講師が加わって18人の教員で運営している。定期試験の採点も、現在では18人で分担している。

本稿では、筆者が勤務するMキャンパスでの履修者を対象として議論する。

3. 2023年度定期試験の結果

はじめに、直近の2023年度における定期試験の受験状況について述べる。2023年度の履修者数は86人である。このうち73人が定期試験を受験した。採点者からは、「必修科目なのに欠席者がいた」「満点がいなかった」という声があった。そこで、まずは試験欠席者について経年の結果と比較する。2018年度以前は試験欠席者については明示されていなかったの、あらためて2014年度から2023年度までの試験欠席者の割合を表2に示す。

表2 2014年度～2023年度の定期試験欠席者の割合

年度	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
試験欠席者の割合	4.8%	4.2%	3.5%	2.3%	2.8%	2.6%	10.9%	3.4%	5.7%	15.1%

2020年度は新型コロナウイルス感染症の広がりにより、試験はオンラインで実施した。そのため、体調不良やインターネットへの接続不調によって欠席者が多かった。2023年度は授業がすべて対面に戻り、試験も対面で実施したが、15.1%の履修者が欠席した。その理由は多様であると推察し、また解明すべきだと考えるが、本稿の趣旨からは外れるので結果を確認するのみにとどめる。

次に、2023年度における受験者の結果について述べる。素点の平均は14.4であり、20点満点中7割に相当する14点を上回った。また、標準偏差は2.74であり、素点のばらつきは極端に大きくはなかった。これより、2018年度以前と同様、レポート・論文を作成する基礎力はおおむねあると考える。素点の分布を確認するために、ヒストグラムを図1に示す。20点満点中6割に相当する12点以上の割合は86.3%であった。この割合は90%以上であることを期待したが、少し下回った。満点は2人であり、全受験者の2.7%であった。問題の難易度は年度によって変えていないので、素点の平均や標準偏差、そして素点の分布や満点の人数など、2019年度から2023年度までの結果を比較し、基礎力について確認する。

4. 2019年度～2023年度定期試験における結果の分析

以下では、2019年度から2023年度までについて定期試験の結果を示して分析する。

はじめに、履修者数と定期試験を受験した人数、素点の平均と標準偏差、20点満点中6割以上の割合、そして満点の人数と割合を表3に示す。

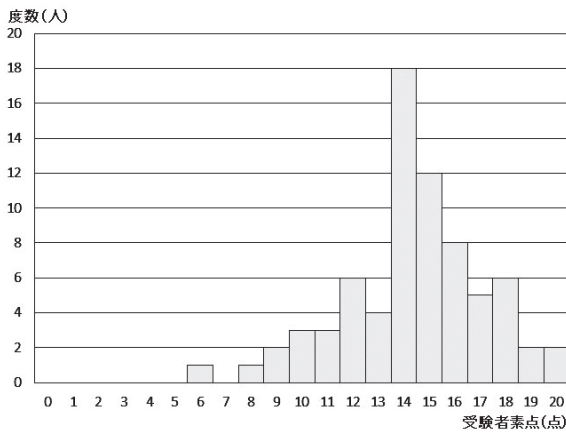


図1 2023 年度定期試験における素点の度数分布

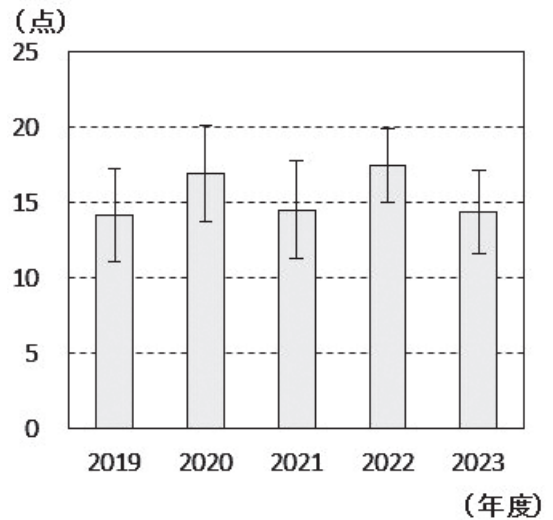


図2 2019 年度～2023 年度定期試験における素点の平均と標準偏差

表3 2019 年度～2023 年度の履修者数と定期試験の結果

年度	2019	2020	2021	2022	2023
履修者数 (人)	154	165	146	105	86
受験者数 (人)	150	147	141	99	73
素点の平均 (点)	14.2	16.9	14.5	17.5	14.4
素点の標準偏差 (点)	3.13	3.15	3.25	2.46	2.74
20 点満点中 6 割以上の割合	82.7%	91.2%	80.9%	97.0%	86.3%
満点の人数 (人)	3	25	4	22	2
満点の割合	2.0%	17.0%	2.8%	22.2%	2.7%

また、図2は各年度における素点の平均と標準偏差のグラフである。

2019、2021、2023 年度の定期試験は対面で実施し、持ち込み不可とした。2020 年度はオンラインで実施し、テキストなどを参照することはかまわないとした。2022 年度は対面で実施したが、オンラインで実施する別のキャンパスに合わせ、テキストと練習問題解答例のみ持ち込み可とした。それらも勘案し、各年度ともレポート・論文を作成する基礎力はおおむねあると考える。平均は2020 年度と2022 年度を除くと14 点台で横ばいになり、素点のばらつきは2019 年度から2021 年度までがやや大きい。

次に、各年度における素点の分布を確認するために、ヒストグラムを図3 から図6 に、20 点満点中6 割以上の割合を図7 に示す。

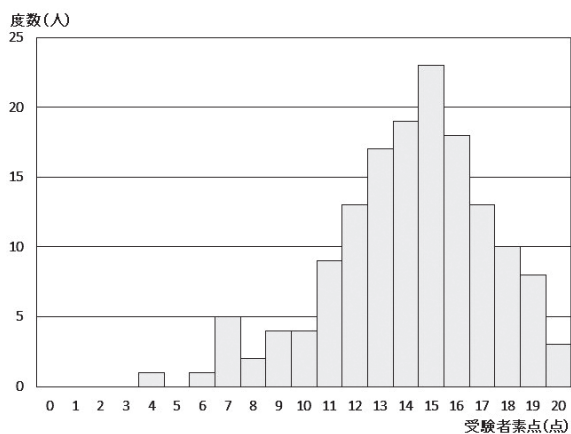


図3 2019年度定期試験における素点の度数分布
およそ左右対称の山型に近い。

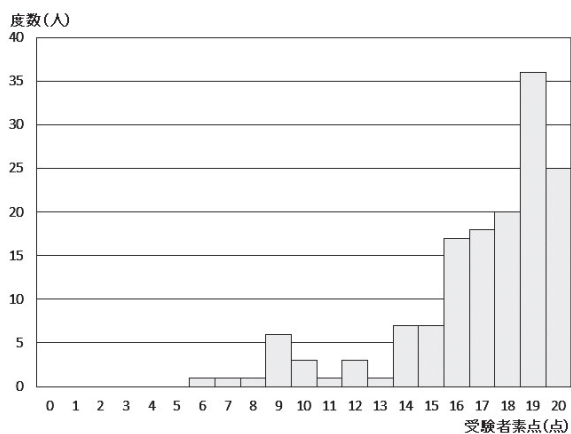


図4 2020年度定期試験における素点の度数分布
高い素点にピークがあり、素点が低くなるにつれて度数が小さくなっている。

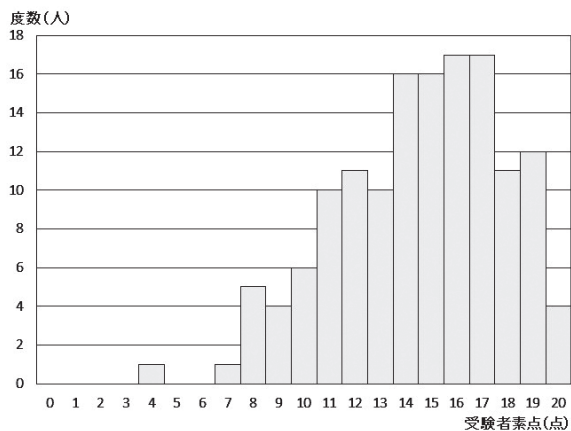


図5 2021年度定期試験における素点の度数分布
ピークが平たいが、およそ左右対称の山型に近い。

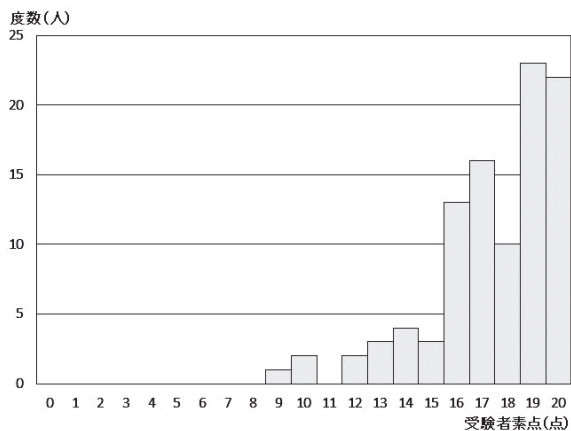


図6 2022年度定期試験における素点の度数分布
高い素点にピークがあり、それより少し低い素点にも山がある。

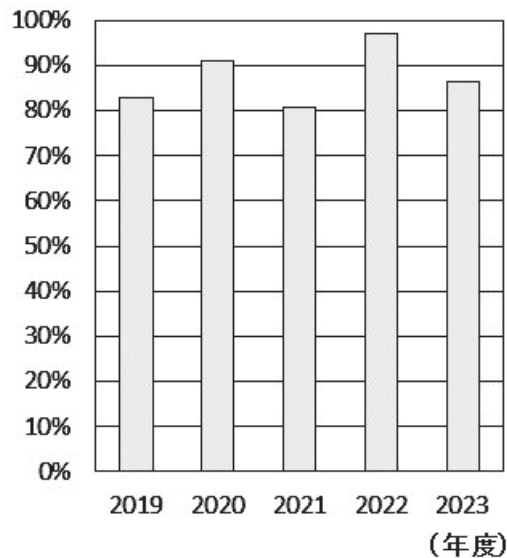


図7 2019年度～2023年度定期試験における20点満点中6割以上の割合

2020年度と2022年度を除き、20点満点中6割以上の割合は90%を下回ったままである。満点の割合も2023年度が目立って小さいわけではなく、2019年度や2021年度と同様、2%台にとどまっている。

5. 2019年度～2023年度授業への出席状況の分析

2014年度から2018年度までの分析では、試験の結果と授業への出席状況との間に相関があることが分かっている³⁾。2019年度から2023年度までについても授業への出席状況に着目したが、毎年度の授業回数が15回ではないことに注意を要する。そこで、2014年度から2018年度までも含めて各年度の授業への平均出席率と出席数の標準偏差を表4に示す。

表4 2014年度～2023年度平均出席率と出席数の標準偏差

年度	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
平均出席率	90.6%	91.9%	92.7%	92.3%	90.2%	89.7%	93.9%	95.1%	91.7%	85.2%
出席数の標準偏差(回)	2.47	2.09	2.12	1.90	1.64	1.95	1.35	1.26	2.08	2.84

2020年度は全14回、そして2021年度は全15回のうち8回において、日時限定のオンデマンド授業を実施した。なお、2021年度の15週目は対面で、授業としてテキストにおける最初の部分を再確認したのち、定期試験を実施した。オンデマンド授業は、自宅で参加できるので出席しやすいと考えられる。また、2023年度の出席率が低いことと出席数のばらつきが大きいことが目立つ。このような状況は、前述した定期試験の欠席者が多かったという結果と符合する。そして2020年度以降、毎回の授業で取り組んでいる確認問題や練習問題の解答例は学習支援システムにアップロードしている。授業に欠席した履修者も、それらの解答例を容易に入手することができる。

6. 授業への出席状況と定期試験の結果との関連

2014年度から2018年度までと同様、2019年度から2023年度までを対象に、授業への出席状況と定期試験の結果との相関について分析を試みる。各年度における出席数と素点の散布図を図8から図12に示す。

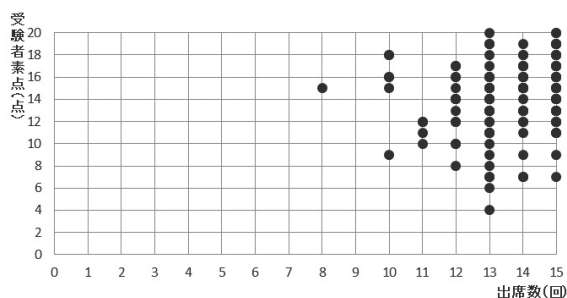


図8 2019年度出席数と定期試験の素点
プロットの広がりが大きい、出席数の多さと素点の高さにやや関係が見られる。

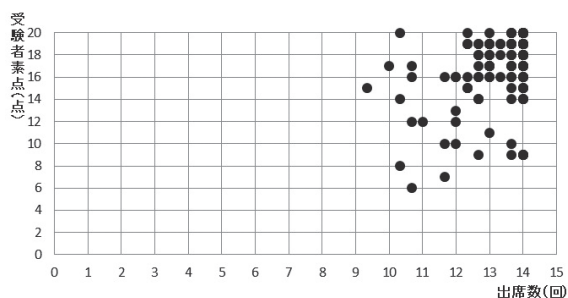


図9 2020年度出席数と定期試験の素点（授業回数は14回）
出席数が多く素点が高いプロットが集中している。

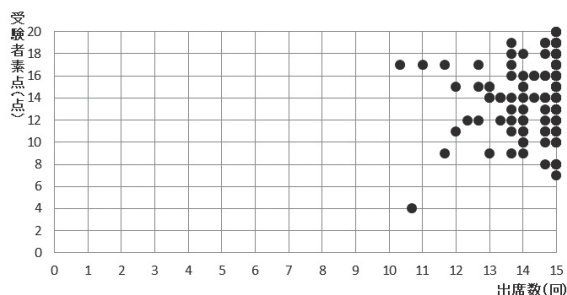


図10 2021年度出席数と定期試験の素点
出席数が多いほうにプロットがやや集中しているが、素点は高低に広がっている。

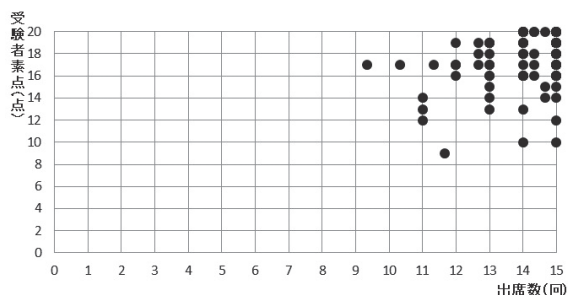


図11 2022年度出席数と定期試験の素点
出席数が多く素点が高いプロットがやや集中している。

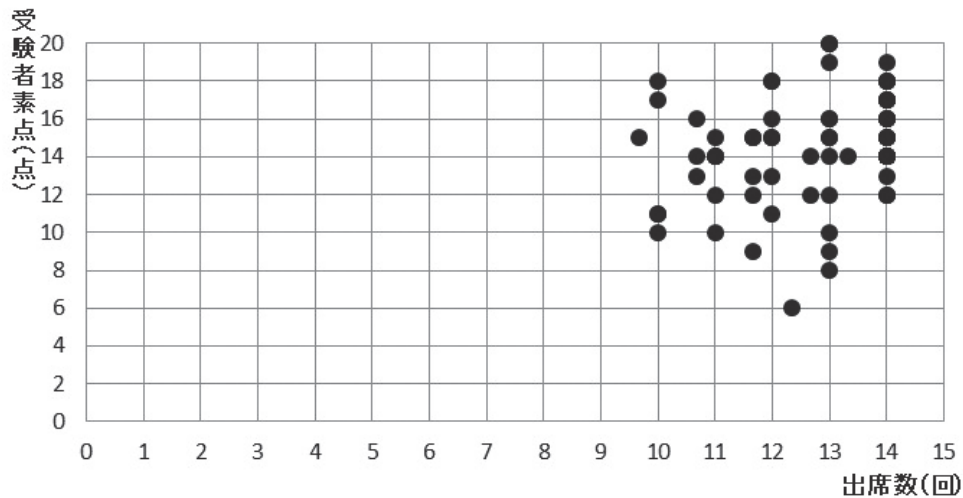


図 12 2023 年度出席数と定期試験の素点（授業回数は 14 回）
 プロットの広がりやや大きいですが、出席数の多さと素点の高さに少し関係が見られる。

ただし、出席数と素点がともに同じ受験者が複数存在するため、プロットが重なる点がある。点の分布に特殊な形は見られず、線形の観点で出席数と素点の相関係数を表 5 に示す。

表 5 2019 年度～2023 年度出席数と定期試験の素点における相関係数

年度	2019	2020	2021	2022	2023
出席数と素点の相関係数	0.163	0.400	0.219	0.334	0.233

これより、2020 年度以降、出席数と素点に弱い正の相関があると考える。

相関係数の有意性を確認するために、無相関であることを帰無仮説として t 検定を試みた結果を表 6 に示す。

表 6 2019 年度～2023 年度出席数と定期試験の素点の無相関検定における t 値と p 値

年度	2019	2020	2021	2022	2023
出席数と素点の無相関検定 t 値	2.007	5.251	2.641	3.492	2.018
出席数と素点の無相関検定 p 値	0.047	0.000	0.009	0.001	0.047

有意水準 5% で、すべての年度における出席数と素点には有意な正の相関があるといえる。

7. 議論

2020 年度以降は、授業に欠席した履修者も確認問題や練習問題の解答例を容易に入手して確認することができるようにした。それでも出席数と試験の素点に正の相関があるということは、欠席した後、自主的にそれらの問題に取り組んで内容の理解を深めようとした履修者がどのくらいいたのかという疑問につながる。また、本学では 2023 年度から授業を従来の 90 分 15 回から 100 分 14 回に変更した。同時に、履修者のパソコン必携を前提に授業を運営することになった。これらに対応すべく、「リテラシー演習」では、文書作成アプリケーションを活用したりペアワークを導入したり、さらには実際にパソコンを使っ

て図書館の蔵書検索に取り組んだりした。今後も、このような能動的な取り組みや協働・協同学習的な活動を継続することで、理解の深まりを期待できると考える。

8. おわりに

本稿では、2019年度から2023年度までにおける「リテラシー演習」の履修者について、一つのキャンパスを対象に定期試験の結果や授業への出席状況を分析した。定期試験の結果として、毎年度、素点の平均は20点満点中7割を上回り、素点のばらつきは極端に大きくはなかった。よって、2018年度以前と同様、レポート・論文を作成する基礎力はおおむねついていると考えることができる。また、定期試験の結果と授業への出席状況との間に相関があることも同様にわかった。引き続き、出席状況を改善することが目標とする基礎力の向上に寄与する可能性がある点に注意していく必要がある。今後の課題としては、2023年度から始まった100分授業とパソコン必携への対応をさらに模索していくことがあげられる。主体的な取り組みや協働的な活動について再考し、授業内容の理解をより深めていけるような運営を考えていきたい。

謝辞

「リテラシー演習」を担当されてきた教員の皆さんに感謝します。

文献

- 1) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて（答申）.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf
 2024/3/22.
- 2) 文部科学省：令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）.
https://www.mext.go.jp/content/20230908-mxt_daigakuc01-000031526_1.pdf 2024/3/22.
- 3) 千葉一博：リテラシー教育後におけるレポート作成の基礎力について，東京家政学院大学紀要，59: 155-165（2019）
- 4) 東京家政学院大学リテラシー演習テキスト作成グループ編：平成31年度東京家政学院大学リテラシー演習テキスト．（東京家政学院大学，東京，2019）
- 5) 東京家政学院大学リテラシー演習テキスト作成グループ編：令和2年度東京家政学院大学リテラシー演習テキスト．（東京家政学院大学，東京，2020）
- 6) 東京家政学院大学リテラシー演習テキスト作成グループ編：令和3年度東京家政学院大学リテラシー演習テキスト．（東京家政学院大学，東京，2021）
- 7) 東京家政学院大学リテラシー演習テキスト作成グループ編：令和4年度東京家政学院大学リテラシー演習テキスト．（東京家政学院大学，東京，2022）
- 8) 東京家政学院大学リテラシー演習テキスト作成グループ編：令和5年度東京家政学院大学リテラシー演習テキスト．（東京家政学院大学，東京，2023）

（受付 2023.3.22 受理 2023.7.26）